

会派行政視察報告書

- 1 期 間：令和元年 8月6日(火)～ 8月8日(木)
- 2 視察先：北海道稚内市・名寄市・旭川市
- 3 参加者： 大川陽一 ・ 久保田俊 ・ 矢部伸幸 ・ 高藤幸偉 ・ 高田 靖
・ 今井俊哉 ・ 板橋 明 ・ 高木 潔 ・ 松浦武志
・ 長 正佑 ・ 松川 翼
- 4 視察事項
 - ① 稚内市 ○再生可能エネルギーの推進について
 - ② 名寄市 ○もっともち米プロジェクト事業について
○駅前交流プラザ『よろーな』について
 - ③ 旭川市 ○旭川市動物愛護センターあにまあるについて

① 北海道稚内市 視察報告

稚内市概要 面積 761.47 km² 人口 17,823 世帯 33,813 人（令和元年7月末日）
市制施行 昭和 24 年 4 月 1 日
議員数 18 名 政務調査費 年額 360,000 円
一般会計予算 平成 31 年度 24,565,000,000 円
平成 30 年度 23,451,000,000 円

稚内市 再生可能エネルギーの推進について

目的： 本市の温室効果ガスの排出量の抑制策を講じ、より高度な環境政策を生み出すため。

総括： 稚内市は新エネルギー産業技術総合開発機構の『大規模電力供給用太陽光発電システム安定化等実証研究』を通じて新エネルギーの普及促進が進んでいる。太陽光発電で言えば、単結晶型や多結晶型、アモルファスなど様々な種類の太陽光パネルが設置されており、多くの実証結果が残されている。また地上からの高さや傾斜角度、そして積雪などの研究も進んでいる。最近チカラを入れているのは蓄電池設備であり、建物タイプとキューピクルタイプの2つの蓄電施設が導入されていた。稚内市では、この蓄電技術が高まった成果として、稚内市が停電になってしまうブラックアウトを経験した時に、自家発電の電力供給ができたことで発電会社との連携ができたとのことでした。もし、電力会社が停電で発電が止まってしまうと、再稼働する電力がなく、再び発電するのにかなりの時間がかかってしまうとのことであった。風力発電や太陽光発電が、発電機を動かす電力を自然から生み出す仕組みは、今後の太田市に必要なのかも知れない。

しかし、稚内市と太田市で大きな違いがあり、稚内市は海沿いの街であり、常に海から強い風が吹いており、太田市の冬のからっ風だけでは風力発電の風力は一時的なものになってしまう。ここで考えたのは、小水力での発電である。稚内市では小水力での発電はしていなかったが、太田市の豊富な水脈や広大な田畑を考えれば、小水力発電を利用する可能性はあるのではないかと感じている。小さな発電力かもしれないが、環境問題に取り組むには小さなことからコツコツと取り組まなければならないと感じている。大規模な太陽光発電も売電価格の減額でうま味が減り、発電力をメインに考えるようになった。そうすると、蓄電か売電かその他の利用を考えることが重要である。新たな再生可能エネルギーを見出すべきなのかもしれない。



② 北海道名寄市 視察報告

名寄市概要 面積 314.62 km² 人口 14,356 世帯 27,359 人（令和元年7月末日）
市制施行 昭和 31 年 4 月 1 日
議員数 18 名 政務調査費 年額 120,000 円
一般会計予算 平成 31 年度 20,682,170,000 円
平成 30 年度 21,342,720,000 円

名寄市 もっともち米プロジェクトについて

目的： 本市の農産物の地産地消を促進するため、市内交流施設を利用しながら推進するため

総括： 名寄市は古くから米作りが盛んであり、今では市内水田の約9割がもち米を作っている。どうして北海道の名寄市がもち米の産地になったのかを聞くと、盆地特有の昼夜の寒暖の差があることによるそうだ。名寄市のもち米は柔らかで、固くなりにくい性質を持っていて、様々な商品に使われている。しかし、もち米は加工品として扱われることが多く、名寄市産という名前が表に出にくいという問題があった。当然、名寄市民ももち米の生産日本一と意識する人が少なかったようだ。そこで、もち米を『まちの宝物』と位置づけ、歴史や食文化を理解してもらい、それが消費拡大につながると考えたのが『もっともち米プロジェクト』である。この取り組みにより消費拡大だけでなく、名寄市民の誇りとして理解が進んで行ったのだ。これは、太田市もモロヘイヤの生産が多いことが、市民に知られることが少なく、同じような取り組みをすれば理解や消費拡大につながるのではないかと期待ができる。

名寄市ではもち米の理解を深めるために、もち米サポーター育成塾制度を設けてもち米サポーターの育成を目的にした農業体験塾を開催している。また産業まつりのなかの「もちつきチャンピオン決定戦」で優勝した方にもち大使の称号を与えたりして、よりもち米をアピールしている。『もっともち米プロジェクト』は、国の政策である「日本の食を広げるプロジェクト事業」の約1000万円を活かしたことから始まっている。その他にも様々な交付金を活かす形で成り立っているようだ。名寄市では着実に実をつけているようだが、その裏には国からの交付金を上手に活かしていることを忘れてはならないだろう。太田市でも、国の政策をいち早くキャッチして、素早い行動に移せることが重要になってくる。太田市では、ヤマトイモや小玉スイカ、ネギやモロヘイヤなど多くの農産物がある。生かすも殺すもアイデア次第なのかもしれない。

名寄市 駅前交流プラザ『よろーな』について

目的： 本市の農産物の地産地消を促進するため。市内交流施設を利用しながら推進するため

総括： 項目が違うのに目的が同じなのは、名寄市ではもち米の地産地消を進める中で、交流施設を利用しているからである。太田市でもバスターミナルに北茨城市の新鮮な魚を売るという考えがあり、そこで太田市の農産物も同じように売れるのではないかと考えている。名寄市では、郊外に大型店舗が進出し、市街地中心部が空洞化する心配があった。そして名寄駅前を中心に都市再生整備計画の中に名寄駅前の「よろーな」の計画があったようだ。再生整備計画の中で、都市機能の強化、市街地の整備などによる賑わいと活力あるまちづくりが第一に挙げられ、それが「よろーな」なのである。再生整備計画には、公共交通機関の充実などによるアクセスしやすく利便性の高いまちづくり、そして緑地の整備など快適で魅力あるまちづくりが挙げられており、これが「よろーな」には見事にマッチングされていました。また「よろーな」では、ラジオの生放送を発信したり、なよろアスパラまつりなども開催して、市民同士の交流につながっている。ただし、この「よろーな」を太田市に建設して、同じような効果が得られるかどうかと云えば、かなり難しいと考える。郊外と中心部というような対立関係があるから、名寄市は上手くいっていると考える。ただ、いろんなイベントや施設の内容で市民同士の交流につなげることができるのは間違いない。その内容が、近隣地区の水産物なのか、本市の農産物なのか分からないが、いろんなアイデアを出すことによって人々への魅力がアップするはずである。これが市が中心で行うべきなのか、それとも民間の知恵と経験を活かすべきなのかは、いろんな成功例を見てみてもどちらとも言えないだろう。



③ 北海道旭川市 視察報告

旭川市概要 面積 747.66 km² 人口 177,903 世帯 334,977 人（令和元年7月末日）
市制施行 大正 11 年 8 月 1 日
議員数 34 名 政務調査費 年額 960,000 円
一般会計予算 平成 31 年度 157,070,000,000 円
平成 30 年度 155,310,000,000 円

旭川市 旭川市動物愛護センター あにまあるについて

目的： 本市のペットの増加に対する見識を深めるため

総括： 旭川市では嵐山犬収容所という施設があったのだが、あまりにも施設環境が劣悪であり広さも設備も十分なものでなかった。そこでできたのが動物愛護センター「あにまある」である。設置されたのは平成22年だそうだが、3年間は運用も厳しかったようだ。しかし、平成25年から犬に関しては殺処分がゼロになっている。猫に関しては未だにゼロには至っていないが、設置当初は500頭以上も殺処分されていたが、去年はたった5頭まで削減できている。一昨年は1頭まで削減できているので、いずれ近いうちにゼロが達成できるだろうと感じられる。

さて、「あにまある」の特徴は犬、猫の譲渡数である。他の同様な施設は犬猫の譲渡は市内の方だけに限られているが、旭川市は市内でも市外でもかまわず譲渡している。たしかに犬猫に市内市外も関係ないので、市内の方に限るのは必要ないのかも知れない。また「あにまある」には獣医師が存在しており、多くの動物を救っている。病気を治すだけでなく、避妊手術を施したり、トリミングをしてあげたりもしている。ただ、専門の獣医師がするという事で、当然ながらかなりの予算が必要となっている。しかし、昨今のペットブームを考えると太田市でも、こういった動物愛護施設が必要なのかもしれない。施設職員は市民と動物の交流を促進させるために、様々な動物愛護のイベントを繰り広げている。そんな活動が、譲渡数の増加につながっていると考えられる。しかし、こういった活動は市が主体になるよりも民間や、違った形での運営の方がより活動の幅が広がるような気がしている。これこそ公設民営の形でできないものだろうか。

